

島根大学大学院教育学研究科「現職短期1年コース」

「課題研究成果論集第5巻」の発刊に寄せて

教育学研究科長 秋重幸邦

本年も現職教員の先生方が、1年という短い期間でありながら、夜間や休日をフルに活用されて課題研究を遂行され、ここに9編の論考としてまとめられました。内容は、算数・数学、社会、英語、体育、音楽など教科に係わる研究、特別支援の在り方、評価方法に関する研究、宇宙を活用した教育法など多岐にわたります。たとえば、音楽の先生は、地元の石見地方の詩人・佐々木寿信の詩による童謡を取り上げられ、地域密着の教材研究に取り組みました。JAXA から来られた先生は、日常業務との関連から宇宙教育というテーマで研究を進められました。それぞれに含蓄のある素晴らしい研究成果が得られています。

この1年を振り返ると、安倍晋三政権の教育改革の司令塔となる「教育再生実行会議」が発足し、矢継ぎ早に、「いじめ問題への対応」、「新しい教育委員会制度」、「これからの大学教育」、「高等学校教育と大学教育との接続、大学入学者選抜の在り方」からなる4つの提言が出されました。教育界もスピード感を持った改革が求められています。

そんな中、新たな万能細胞（STAP細胞）発見のニュースが飛び込んできました。マウスの体細胞を弱酸性の液体で刺激するだけで、あらゆる細胞に変化できる万能細胞をつくることに、世界で初めて成功したとの報です。山中伸弥教授のiPS細胞よりも短時間で効率的に作成できるほか、がん化のリスクが小さいという強みがあるといいます。理化学研究所の30歳のうら若き女性、小保方晴子さんの発見に、日本中が勇気づけられました。「やめてやると思った日も、泣き明かした夜も数知れませんが、今日一日、明日一日だけ頑張ろうと思ってやっていたら、5年が過ぎていました。」という彼女のコメントに、負けず嫌いの研究者魂を感じました。

現職短期履修コースに入学され、無事、成果発表まで至られた皆様には、先ずもって敬意を表したいと思います。1年という短い時間であっても、課題研究とともに、自分と対峙して思考を巡らすことができたのであれば、この1年は無駄ではなかったはずです。たとえ苦しい1年であったとしても、10年先に振り返ってみて、あの時の1年が懐かしくしかも誇りに思えるものになると、確信しています。

最後に、先生方を快く大学院に送り出していただいた、島根・鳥取の両県委員会、各市町村の教育委員会、並びに学校関係者の皆様には、心からお礼を申し上げます。また、昼夜を問わず、指導いただいた研究科の先生方にも感謝いたします。